

『傷寒論』傷寒例に見られる 四時正気の病と変成病の意義

鈴木 達彦¹⁾, 遠藤 次郎²⁾

¹⁾北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部, ²⁾千葉県

受付:平成22年9月29日/受理:平成23年1月24日

要旨:『宋板傷寒論』に附してある傷寒例は、三陽三陰病篇等と版を同じくするものでありながら、王叔和による竄入と理解されてきた。そのため、張仲景が著した原『傷寒論』とは異なるものとして研究するに値しないものとして扱われている。著者らは傷寒例で展開されている四時正気の病と変成病について、その意義を検討し、これらと『傷寒論』本論の病理論との関わりを明らかにした。四季には、冬は寒、春は温、夏は暑、秋は涼といったように、それぞれに対応した四時気がある。その季節が持っている四時気によっておこる病気を四時正気の病とするが、この時の病邪は四季が本来持っている正気なので、病は規則正しく伝変し、予後がよい。それに対して変成病は、四時正気の病が治癒に至らずに起こった病である。病を抱えたまま季節が進むと、初めに罹患した病邪とは異なる気を受け複雑化する。

キーワード: 傷寒論, 傷寒例, 四時気, 変成病

緒 言

『傷寒論』の初めに附してある「傷寒例」は張仲景の作ではなく後人の竄入であると言われている¹⁾。また、内容が本論と質的に異なることから、本論を検討するに値しないものとし、これまでの『傷寒論』研究から除外される傾向にあり、三陽三陰病篇等と版を同じくするものでありながら、医学史上の位置付けも顧みられずにいた。

著者らはすでに『千金方』「傷寒門」に見られる華佗方について検討を加え、『傷寒論』の病理論の源流を採った²⁾。その研究過程で、『傷寒論』の「傷寒例」の中に『傷寒論』の病理論の源流を保持している内容が存在することを見出した。本稿では、『春秋左氏伝』、『難経』等の医論で補足しながら、「傷寒例」の中に見られる「四時正気の病」と「変成病」の概念を中心に検討を加えた。なお、本稿では特に指定のない限り、「傷寒例」と言ったときは『傷寒論』傷寒例を、『傷寒論』と言ったときは『傷寒論』の本論(三陽三陰病等の

篇)を指す。なお、本稿では『傷寒論』、『金匱要略』及び「傷寒例」は、基本的には日本東洋医学会編。善本翻刻 傷寒論・金匱要略。東京;2009. によった。また、『傷寒論』の「傷寒例」の条文では理解しにくい文章でも、敦煌医書中の「傷寒例」の引用文(p.3287)をみると理解できる例も少なくない³⁾。本稿では敦煌本を適宜採用して検討を行った。

1. 「傷寒例」を検討する意義

本論に入る前に、今まで「傷寒例」についての研究があまりなされてこなかった背景について検討しておきたい。

まず1つに、編纂者についての問題である。「傷寒例」中に「①今搜採仲景田論、録其証候診脈声色対病真方有神驗者、擬防世急也」の文がある。この文は『外台秘要方』にも引用されているが、『外台秘要方』は①を「王叔和曰」としているため、「傷寒例」は張仲景の作ではないと理解されることがある¹⁾。しかしながら、①を内容からみ

ると「仲景の証候，診脈，声色，対病，真方」を採って編纂したことになるが，今日の「傷寒例」には処方などはほとんど記されておらず，内容と合致しない．このため，①を「傷寒例」全体の跋文とみなすことはできない．同時に，①だけで「傷寒例」を王叔和作というのは難しい．王叔和は張仲景関連の医書の大部を編纂しているので⁴⁾，この中の一部がここに紛れ込んだと見るべきであろう．

2つ目に，大きな問題となるのは「傷寒例」の内容についてである．「傷寒例」は全体的に見て，傷寒に加え，四時気，時行，温病等の議論が多い．これらは，『傷寒論』の本論ではあまり扱われていないので，これほどテーマの異なるものが原『傷寒論』に含まれるはずがないとされている．この点については，「陰陽大論」との関わりに注目したい．「傷寒例」では始めに「陰陽大論云」として四時気や温病や時行について書かれているところから「陰陽大論」という書物にはこれらの内容が書かれていたことがわかる．また，「傷寒例」の中ほどに記されている先表後裏の治方の原則についての条文（後述⑧）に対して，敦煌出土資料では，「仲景曰，陰陽大論云」として引用している．この「陰陽大論」は張仲景の序文の中にも見られ，『傷寒論』を著わすときに参考にした医書の1つとして挙げている⁵⁾．これらのことを考え合わせると「傷寒例」の主要な部分は張仲景が参考にしたとされる「陰陽大論」によっていると見做すことができよう．もちろん，時代的に何段階もの編纂過程を経たものの場合，原作の部分と後のものを区別することが困難なことが多いが，途中の段階で王叔和の手が加わったにしても四時気等の議論が張仲景の時代まで遡る可能性があり，一様に捨て置く内容ではないのである．

以上に「傷寒例」に関わる問題点をあげたが，本稿ではこれ以上「傷寒例」の編者が誰であるか，張仲景が著し得たのかということを追求するのは避けたい．①が「傷寒例」の内容と合致しない上に，「傷寒例」が四時気を扱っていることを合わせて，王叔和による竄入だとする議論は成立しないであろうし，後節で詳しく検討するように，「傷

寒例」の内容には原始的な傷寒の見方が存在し，『傷寒論』の理論が形成される過程を見ることのできる条文が多い．著者らが重要視するのは「傷寒例」に見られる四時気の議論を中心に検討することで『傷寒論』本論との位置付けを明らかにし，その医学理論を再吟味するに至るか，ということである．

2. 「四時正気」と「時行の気」の病

「傷寒例」と『傷寒論』の立場の違いを考える上で，王叔和『脈経』中の次の編纂方法が参考になる．本書の巻3には，五臓五腑の各々の脈論が整理されている．各々は「右新撰⁶⁾」，「右四時経」，「右素問，鍼経，張仲景」の3つに分けられている．王叔和が以上のように3つに区分したということは，王叔和は張仲景の医論（傷寒・金匱の医論を含む）を『素問』，『靈枢』の中を含め，「四時経」と区別していたことを意味している．「四時経」は今日残されていないが，『脈経』に記されている「四時経」の内容は表題からもわかるように春夏秋冬や天地の気といった外界の気の規範を基にして組み立てられた原始的な医論である．「素問，靈枢，張仲景」にも春夏秋冬を基にした医論は数多く存在するが，ここでは外界の規範と人体内の規範の両者を基にした高度な病理観が展開されている．『脈経』に見る「四時経」と「素問，靈枢，張仲景」の区分は明らかに四時気等の議論をする「陰陽大論」を基本とした「傷寒例」と，三陽三陰病論を基本とした『傷寒論』との関係に呼応している．王叔和の時代にこのような両者を対立的にとらえる見方が存在していたと見ることができよう．

「傷寒例」にみられる基本的な病理論の特徴は，病の原因を「四時正気」による病と，「時行の気」による病の2つに大別している点である．

- ②「陰陽大論云，i) 春气温和，夏気暑熱，秋気清凉，冬気冰冽，此則四時正気之序也 …… 其傷於四時之気，皆能為病 …… ii) 中而即病者名曰傷寒，不即病者寒毒藏於肌膚，至春變為温病，至夏變為暑病 ……」
- ③「凡時行者，春時応暖而反大寒，夏時応熱而

反大涼 …… 此非其時而有其氣，是以一歲之中長幼之病多相似者，此則時行之氣也」

②が「四時正気」による病，③が「時行の気」による病の解説である。はじめに②の「四時正気」による病について検討したい。②は内容的に i) と ii) の2つに大別される。i) では、春の気は本来温和で、夏は暑熱、秋は清涼、冬は冰冽の属性を持っており、これが「四時の正気」であると述べている。ここには記されていないが、一般に春夏秋冬に風暑湿寒の気が配当される。四時正気の病は、このような春夏秋冬の各々の季節特有の属性を持った気に侵された病を言ったものと考えられる。一方、ii) においては冬の気である寒邪を基本に考え、寒邪により即刻病になることもあるが、寒邪が毒となって肌膚に蔵され、春に至って寒邪が温邪に変成して温病となり、夏にまで持ち越すと病邪は熱邪に変成して暑病となるという内容のことを述べている。i) では春夏秋冬に各々の季節の病邪を受けるという多元的な病因論を採っているのに対し、ii) では寒邪が体内に潜り込み、春夏秋に則した異気にあたって複雑な病邪へと変成する、という寒邪を中心とした一元的な病因論を採っている。i) は四時正気の病であるので各々の季節の病邪は等しく独立して考えられるが、ii) では寒邪が治癒しないため、季節が進むごとに自然とその季節の気を受ける。寒邪にとっては他の季節の気は異気であり病を変成させる要因となる。

一方、③の条文では、春なのに寒かったり夏なのに涼しかったりする、季節に即応しない病を「時行の気」による病としている。

以上の病因論の中で基本となっているのは「四時正気の病」という見方である。四季の気が乱れた「時行」に対し、「四時正気」は規則正しく運行する気である。これがどうして病の原因になるのであろうか。近い例として『靈樞』「九宮八風」(『太素』「九宮八風」) や『素問』運氣七篇などに見られる運氣論がある。ここでは、正(実)風と虚風の概念が存在し、「傷寒例」の「四時正気の病」と「時行の気の病」に対応する。すなわち、正(実)風は季節に合った方角から吹いてくる風

(春なら東風など)であり、虚風は季節にふさわしくない方向から吹いてくる風である⁷⁾。この「実風、虚風」の見方と「四時正気、時行」の見方の大きな違いは、実風は万物をはぐくむことはあっても病の原因にはならないのに対し、「四時正気」は病の原因ともなる点である。後節で改めて述べるが、「四時正気」の病の伝変の仕方と「時行」の病の伝変の仕方には明瞭な差異が設けられている。「四時正気」の病は経脈に添って規則正しく伝変するのに対し、「時行」の病の伝変は不規則的で治療の法則が立てづらい。このことを考えると、「四時正気」はその名が示す通り、本来病邪ではないが、これを受ける体の方に問題があった時、体はこれを病邪として感じることで起こる病である。ただし、この病邪は、本来正気なので病の伝変は経脈に添って規則正しく伝変する。これに対し、「時行」の気は本々邪気なので病の伝変も不規則的である、と見ることができ、「四時正気、時行」の病の見方は「実風、虚風」の概念と近似している。

ここでわかりづらいのが「変成病」についての概念である。冬に傷寒になるのは「四時正気」の病であるが、寒邪が毒となって体内に蔵され変成した病邪はもはや規則的な運行をすることはない。次節ではii)の「変成病」についての病理観を再検討したい。

3. 「傷寒」と「両感」と「変成病」

前節で明らかにした「四時正気の病」に加えて、「変成病」を含めた2者について経絡論等を用いて展開した例が「傷寒例」の中に見られる。

- ④ 「i) 凡傷於寒則為病熱，熱雖甚不死，ii) 若兩感寒而病者必死 …… iii) 若更感異氣變為他病者當依後壞病証而治之⁸⁾」
- ⑤ 「尺寸俱浮者太陽受病也。當一二日發，以其脈上連風府故頭項痛腰脊強，尺寸俱長者陽明受病也 …… 尺寸俱弦者少陽受病也 …… 尺寸俱沈細者太陰受病也 …… 尺寸俱沈者少陰受病也 …… 尺寸俱微緩者厥陰受病也」
- ⑥ 「若兩感於寒者1日太陽受之即与少陰俱病則

頭痛口乾煩満而渴，2日陽明受之即与太陰俱病 …… 3日少陽受之即与厥陰俱病」

- ⑦「若脈陰陽俱盛，重感於寒者變成温瘧，陽脈浮滑陰脈濡弱者更遇於風變為風温 …… 更遇温熱變為温毒，温毒為病最重也 …… 更遇温氣變為温疫，以此冬傷於寒發為温病，脈之變証方治如說」

④で、i) 傷寒、ii) 両感、iii) 變成病の3つの病の概念が示され、i), ii), iii) のそれぞれの具体例として⑤、⑥、⑦が展開されている。ここでは前節でみてきたような春夏秋冬の各々の病邪を単位にした多元的なものではなく、「傷寒」という単一の病邪を中心に全体を論じている。したがって、ここにおける病因論は②のii)に見られる、冬に傷寒になり、寒毒が變成して温邪や熱邪になるという見方と同じである。すなわち、⑤、⑥の三陽三陰の経絡論は冬に傷寒にかかった「四時正気」の病の段階であり、⑦は寒毒が變成して温病になった段階に相当すると見ることができる。⑤、⑥が経絡論で述べられているのは「四時正気」の病は経脈に添って病邪が規則的に伝変するからであり、⑦が経絡論で述べられていないのは、「變成病」は不規則的な流れをするからに他ならない。

⑤、⑥、⑦の病理論は②のii)に見られる病理論を基本としながらも、多重感染という複雑な構造を採っている。すなわち、⑤は「傷寒」による1回の感染、⑥は「傷寒」による2回の感染、⑦は「傷寒」あるいは風、熱などの異気による2回以上の感染の病である。この多重感染の病理は次の経絡論に基づくものと考えられる。ある経絡が病になり、全経絡を巡った後、元の経絡に戻り、2回目を巡るときには病は治るという見方をして⁹⁾いる。この治癒するための2回目の巡りの時に2回目の感染をすると治癒の見通しは立てづらくなる。④のii)における「若両感寒而病者必死」という記述は以上の見方に基づくものである。⑦の段階の3回以上異気が「伝経」とすると治癒はさらに難しくなる。後節で改めて述べるが、「四時正気」による傷寒の病の段階は規則性を持っているので、体の方も自然治癒する力を持っている。

一方、變成症の段階になると自然治癒することはほとんど期待できない。④～⑦の条文は「四時正気」の病と「變成病」の人体における治癒の能力について経絡論を用いて解説していると見ることもできよう。

④のiii)において「更に異気に感じ、変じて他病となる」病を「壊病」として扱っている。これより、本来の「壊病」は病邪の伝変の規則性が崩壊した病を意味していることがわかる。『傷寒論』の中にも「壊病」の概念がみられるものの、『傷寒論』には「四時正気」による規則的な伝変という概念が薄らいでいることから、本来の「壊病」の概念も不明瞭になっている¹⁰⁾。

4. 『春秋左氏伝』に見る「六気・六疾」

『左伝』昭公元年(541B.C.)に「六気・六疾」の医論がみられる。前節までに見てきた「傷寒例」の病因論を整理するのに『左伝』の「六気・六疾」論が役立つ。以下「六気・六疾」論の概略を明らかにするとともに「傷寒例」の病因論と比較検討した。

- ⑧「天に六気あり …… 六気とは陰陽風雨晦明と曰う。分かれて四時と為り、序でて五節と為る。過ぐれば則ち菑を為す。陰淫は寒疾し、陽淫は熱疾し、風淫は末疾し、雨淫は腹疾し、晦淫は惑疾し、明淫は心疾す」

『左伝』には⑧の六気・六疾論と近似した「陰(冬)、陽(夏)、風(春)、雨(秋)、雷(震)、電(菑)」の論も見られる(昭公4年)。これらを参考にすると⑧の六気・六疾論を表1のように天地

表1 六気・六疾論と傷寒・両感・變成病論と「傷寒有五」の関係

	六気		六疾		「傷寒例」	傷寒有五
	(陰)	(陽)	(陰)	(陽)		
天	陰	陽	寒疾	熱疾	傷寒	傷寒、熱病
地	雨	風	腹疾	末疾	両感(天+地)	湿温、中風
人	晦	明	惑疾	心疾	變成病	温病

人三才と陰陽説の立場から整理するのが妥当と考えられる。病は一般に悪寒、発熱を基調とする寒熱論からスタートする。この段階では寒証と熱証とはちょうど山彦のごとく呼応しあう関係にある。「天地人」の「天」に相当する寒熱論の段階から、「地」の段階になると疾病を構成する要素は「寒熱」よりも「風、雨」といった実体をもったものとなる。すなわち、寒熱の段階から風湿証を呈するようになる¹¹⁾。また、「地」の段階に至ると末疾（四肢末端、表証）と腹疾（裏証）といった表裏証を呈するに至る。「天地人」の「人」の段階になると、疾病を構成する要素はさらに複雑になり、人氣（心疾、惑疾）が主導的な役割を担うようになる。

以上みてきた『左伝』の「六氣・六疾」論に「傷寒例」の理論を対照させてみると次のようである。「傷寒」は寒熱の病証を基本にしているので「天」の段階に相当し、「両感」は陰経の病も重なっているので「地」の段階に相当する。「変成病」は寒邪に「異氣」が加わってさらに複雑になった病なので、「人」の段階に相当するとみなすことができる¹²⁾。

5. 傷寒の脈と変成病の脈

『左伝』の病の基準を参考にしながら「傷寒例」における傷寒の脈と「変成病」の脈の違いを明らかにしていきたい。

⑤に示された「傷寒」の脈は陰脈（寸）と陽脈（尺）が同等（「俱」）である¹³⁾。その理由は「傷寒」は基本的には寒熱の段階であり、陰（寒）と陽（熱）は相互に妨げるものがなく、山彦のごとく呼応するためである。「傷寒例」ではこのことを「天地動静陰陽鼓擊者各正一氣耳」と言っている。

病症が慢性化し、障害物が現れたり、交流する気が風湿等の実体を持って質が異なるようになると陰脈と陽脈は呼応しなくなる。例えば、先に挙げた⑦の「変成病」の例で言うと、「脈陰陽俱盛、重感於寒者変成温瘡」は二重感染をいったものであるが、両者ともに寒邪なので「陰陽俱盛」である。次の寒邪が、風邪という「異氣」にあたると「陽脈浮滑陰脈濡弱」という陽脈と陰脈が呼応し

なくなる。このように「四時正気」の傷寒と「変成病」とは脈の上でも各々の特徴を表していると言える。1例ではあるが『傷寒論』の脈論と比較してみたい。『傷寒論』では「傷寒」を「脈陰陽俱緊者名曰傷寒」と定義しており、「傷寒例」と同じく陰脈と陽脈が同等であると見做しているが、中風の脈証は「傷寒例」の寒風証（⑦）に相当する「陽脈浮滑陰脈濡弱」の脈証に一致する。このように、『傷寒論』の脈論の基本は「傷寒例」と同じであるといえることができる。

6. 傷寒有五

「傷寒例」には「春傷於風、夏傷於暑、秋傷於湿、冬傷於寒」という四季に配当された病因論がみられるものの、ほとんどが寒邪を中心とした一元論で議論されている。「寒」に片寄らない四季に配当された病因論について、本節では『難経』58難に見られる「傷寒有五」の論を再検討し、「傷寒例」の論と比較した。

⑨「傷寒有五、有中風、有傷寒、有湿温、有熱病、有温病……中風之脈、陽浮而滑、陰濡而弱、湿温之脈、陽浮而弱、陰小而急、傷寒之脈、陰陽俱盛而緊濡、熱病之脈、陰陽俱浮……温病之脈、行在諸經不知何經之動也……」（『難経』58難）

58難では広義の傷寒に、中風と傷寒（狭義）と湿温と熱病と温病の5つがあるとしている。この5つの病を『左伝』の「六氣・六疾」論に合わせて並べてみると表1のようである。「傷寒」を「陰」に、「熱病」を「陽」に、「湿温」「中湿¹⁴⁾」を「雨」に「中風」を「風」に配当させるのには問題がないとしても、「温病」を「晦、明」に配当させるのは肯首しかねるかもしれない。この問題も含めて脈論の立場から再検討したい。「天」に相当する「傷寒」と「熱病」の脈がそれぞれ「陰陽俱盛」、「陰陽俱浮」と陰陽の脈が同等であるのに対し、「地」に相当する「湿温」（「中湿¹⁴⁾」の「中風」の脈状がそれぞれ「陽濡而弱、陰小而急」、「陽浮而滑、陰濡而弱」と陰陽の脈が同等でない

ばかりでなく、複雑になっていることがわかる。さらに、「人」に相当する「温病」の脈状を見ると「行在諸経、不知何経之動」と記されている。すなわち、陰経、陽経の対立の関係もなくなり、一定の経脈に添った動きもしなくなると言っている。このことは、「人」の段階はいろいろな要素が最も複雑に絡み合っている、という『左伝』等に見られる特徴に合致する¹⁴⁾。「温病」がこのような複雑な要素を持った「人」に配当されるのは、温邪の変成度が最も高い(⑦「温毒為病最重也」)点に注目したためと考えられる。以上の『左伝』や「傷寒例」との比較検討から『難経』においてすでに「四時正気」の傷寒と、「変成病」としての温病の概念が存在していたと見ることができる。

『素問』「病能論」の中に当時の古文獻である『上下経(経脈上下経)』や『奇恒』を解説した部分が存在する。そこで、「上経者言氣之通天也、下経者言病之变化也」、「奇者使奇病不得以四時死也。恒者得以四時死也」と記している。これよりこの時代から、「四時正気」の病と「変成病」の見方が存在し、この見方が基本になっていたことが理解される。「変成病」の「変」の時には、「天道は正常にして不変、これに反するものを変という¹⁵⁾」意味がある。天地の気は規則性が保たれ不変であるが、これが人体の中に入り込むと人氣の影響でしばしば改変される^{16,17,18)}。「変成病」は、規則的な天地の気の病が不規則的な人氣の病に変成した病を意味し、「変」の原義に近い使われ方であるということができよう。

7. 陰陽合、陰陽離、陰陽交易

「傷寒例」の中に易の陰陽で「四時正気」の病と「変成病」を論じている箇所がある。

⑩「但天地動靜、陰陽鼓擊者各正一氣耳 ……是故冬至之後、一陽爻升、一陰爻降也。夏至之後、一陽氣下、一陰氣上也」

⑪「斯則冬夏二至、陰陽合也。春秋二分、陰陽離也。陰陽交易、人變病焉」

⑩、⑪の条文を易の世界の理論を踏まえて解説

すると次のようである¹⁹⁾。10月は六爻全体が陰で構成されているが、11月の冬至になると最下部の爻が陽になり、陽が上昇する動きをする。これに伴い最上部の陰爻は押し出され下に降りる(「一陽爻升、一陰爻降」)。逆に、夏至(5月)においては最下部の爻が陰となり上昇し、最上部の陽爻は下に降りる(「一陽氣下、一陰氣上」)。春分(2月)と秋分(8月)においては陽爻と陰爻が同等の状態から陰爻(秋分)と陽爻(秋分)が引きはじめる。冬至、夏至を「陰陽合」というのは、陰だけの世界に陽が合し始め(冬至)、陽だけの世界に陰が合し始めた(夏至)ためである。また、春分、秋分を「陰陽離」というのは、陰と陽が半々の状態から相互に分離していくからである。

以上のごとく、外界は春分、秋分、冬至、夏至で陰陽の理合が周期的に繰り返される。ここまでの文章であれば、単に外界の気の運行を述べたものとも受け取れるが、⑩では「陰陽合」と「陰陽離」とともに「陰陽交易、人變病」の人氣の見方を付け加えている。この3つの段階に注目するならば、この3段階は人体における「傷寒」と「両感」と「変成病」の3段階に相当すると理解することが可能である。すなわち、「傷寒」は人体に対し、陰邪、あるいは陽邪が「合」した段階であり、「両感」は陰陽表裏に分「離」した病証を呈する段階であり、「変成病」は陰陽が複雑に絡み合った「陰陽交易」の病である。以上のことから⑩、⑪は「傷寒」「両感」「変成病」の3段階を易の陰陽爻の消息によって理解しようとした条文と見ることができよう。

8. 陰陽交

前節でみられた「陰陽交易、人變病焉」が病名で言うと「陰陽交」にあたることから、「陰陽交」が「変成病」の特徴を持っているか否かの検討を行った。「陰陽交」は『傷寒論』では不可不可篇の最後に見られる。

⑫「温病汗出輒復熱而脈躁疾、不為汗衰、狂言不能食、病名為何。對曰、病名陰陽交、交者死」(『金匱玉函經』熱病陰陽交併生死²⁰⁾)

通常なら、「発熱汗出而解」，「発汗則愈」のように汗が出て治るはずであるが，また熱がぶり返す。このように陰証（汗出）が終わらないうちに陽証（発熱）がはじまってしまう病証を「陰陽交」としている。一般に古典籍では，「陰陽交」は「陰陽并」と対峙され，前者は予後不良，後者は予後良好といわれている。「并」の字は，「二人相並び，これを横につなぐ形」で¹⁵⁾，陰と陽が順の関係でつながっている意味を持つ。一方，「交」の字は足を膝関節の部分で組んでいる形であり¹⁵⁾，陰と陽が交叉し，両者が逆接の関係でつながっていることを意味していると解される。『素問』「評熱病論」では⑩の「陰陽交」を「邪気交争於骨肉」と説明している。関節における陰陽交叉は関節内の陰精と外からの陽気とが交叉することを意味している。この体内の陰精と外界からの陽邪との病理論は，古くは「厥」や「厥逆」の病理論として知られている²¹⁾。「厥逆」の病理論では多くの場合，陰精が虚の状態の時に陽気が侵入し，陰精の厥逆の病証（煩躁，妄言，胃中不和など）を呈する。「陰陽交」の病理論や病証（脈躁疾，狂言，不能食）は，「厥逆」のそれらにきわめて近い。以上の事実に加えて，「陰陽交」を易で解説している例（⑩，⑪）が存在することから，「陰陽交」は「陰陽并」とともに，厥逆の病理論を易の爻の視点に立って考えられた病理論と見るのが妥当であろう。すなわち，陽爻，陰爻は通常平行に並び，上下に消息運動をする。この状態が「陰陽并」の段階であり，また，「四時正気」が規則正しく運行している段階である。一方，外界の規則的な陰陽の気は体内深く入ると陰陽の爻は交錯し²²⁾，「陰陽交」の病となる，と見ることができる²³⁾。

「陰陽交」，「陰陽并」の病理はすでに『史記』扁鵲倉公列伝の倉公伝の中に見出され，古くから行われていた理論であることがわかる。また，⑫の条文は『脈経』巻7の熱病陰陽交并少陰厥逆陰陽竭盡生死証第18中に存在し，熱病8条，陰陽并とともに記されている。一方，『素問』「評熱病論」では⑫の条文を引用しつつ，これに解説を加えている。したがって，⑫の条文を含む『脈経』の一連の条文は『素問』「評熱病論」よりも古い

時代のものを引用したと見做すことができる²⁴⁾。内容的に見ても「陰陽交」は人氣の病に属する厥逆の病に対し，外界の陰陽の法則である易の理論で解釈しようとしている。このことから陰陽交は原始的な視点にたった病理論であるといえることができる。

「陰陽交」を「変成病」の視点から見直してみたい。⑫の条文では初めに「温病」という「変成病」からスタートさせ，病をぶり返しながら進むことを述べている。この理論からも⑫の病が重篤な「変成病」であると見ることができる。

「陰陽交」のような重篤な「変成病」ではないが，⑫における「発熱汗出而」の病理論を『傷寒・金匱』に求めると，ある傾向を見出すことができる。典型的な例を示すと以下のようである。

- ⑬「太陽病発熱汗出悪風脈緩者名為中風」（『傷寒論』太陽病篇）
- ⑭「太陽病発熱而渴不惡寒者為温病，若発汗已身灼熱者名風温」（『傷寒例』）
- ⑮「風湿脈浮身重汗出惡風者防已黃耆湯主之」（『金匱要略』痙湿喝病脈）
- ⑯「太陽中熱者喝是也。其人汗出惡寒身熱而渴也」（『傷寒論』痙湿喝脈）

以上あげた例の多くは傷寒に感染した後，「風」，「温」，「湿」，「熱」といった「異気」に再感染した議論である。「異気」による病は傷寒による寒熱の病とは異なり，複雑な「変成病」を形成する。⑬，⑭，⑯にみられる「傷寒」から「異気」に再感染した病については『傷寒論』では総論を述べるだけで，本論の中ではほとんど展開されていない。この事実，『傷寒論』の根底には「四時正気」と「変成病」の見方が存在しているが，「変成病」の展開は限定されている，と見ることができよう²⁵⁾。

⑬から⑯の条文の中で唯一『傷寒論』本論で展開されているのが⑬の中風である。『傷寒論』で「傷寒」と対をなして論じられる「中風」は「傷寒例」の立場からすると「変成病」をおこす異気の1つとみなされている²⁶⁾。「変成病」を起こす

中風は『金匱要略』の中に見られる「中風（半身不随を伴う病証）」に直接つながることは容易に理解されるが²⁵⁾、一般に軽度な感冒とみなされる『傷寒論』の中の中風も、先に脈証等で明らかにしたように「変成病」の流れを汲んでいる。「変成病」としての中風の特徴が『傷寒論』の条文のそこそこに見出され、この視点に立った『傷寒論』の条文の再検討が必要であろう。

9. 虚盛之治

「傷寒例」には「四時正気」の病と「変成病」の治療原則を「虚」と「盛」の用語を用いて論じている箇所がみられる。

⑰「其陽盛者府也。陰虚者蔵也。此是両感脈也。汗出即死、下之即愈。若陰盛陽虚者汗出即愈下之則死。如是者神丹安可誤発、甘遂何可妄攻也。虚盛之治相偕千里……然則桂枝入咽陽盛必亡也。承氣入胃陰盛必夭也……医術浅狭者必不識不治也」（敦煌本）

⑰の類文が『難経』58難に見られるが²⁷⁾、これに注をつけた多くの人は、この文章は何らかの錯簡があり、「伝写の誤」とであると言っている²⁸⁾。それほど、一般的な視点からは理解できない内容となっている。以下、この問題点も含めて検討したい。

はじめに「陽盛」と「陰虚」を定義して、「陽盛者府也、陰虚者蔵也」としている。この定義は「陽盛の陽は府、陰虚の陰は蔵」の意味であり、「陽盛陰虚²⁹⁾」を定義したものではない。「陽盛陰虚」は「是両感脈也」につながることから、ここにおける意味は「陽脈が盛で、陰脈が虚」の両感証について論じていることがわかる。「陽盛陰虚」の治療法である「汗之則死、下之則愈」の文は一般常識からすると理解に苦しむ³⁰⁾。なぜならば、表の邪気が盛ん（陽盛）ならば発汗させて治すべきであり、裏が虚（陰虚）していれば下してはならないはずである。にもかかわらず、「汗之則死、下之則愈」と記している。したがって、ここでの「虚」、「盛」は別な視点からの解釈が必要である。その

別な視点とは、前節で検討した運氣論に見られる「実風と虚風」の虚実の見方であり、また、「四時正気」の病と「変成病」の見方である^{31,32)}。以上の虚実の概念で⑰の「陽盛陰虚、汗出則死、下之則死²⁹⁾」の条文を解釈すると次のようである。陽脈が盛んで規則的な動きをし、陰脈が虚で不規則的な動きをする状態の時、発汗により陽気（正気）を排泄すると体の規則性が失われ予後不良である。このようなときは、正気による治療力にまかせて手を加えるべきではない。一方、裏に虚邪が侵入したのに対しては汗吐下等により積極的に排除し、体の規則性を回復すべきである。「陽盛陰虚」の条文は両感の病でも病邪が陽（表）から入ることを前提とし、「先表後裏」の治療法（後述⑱）がとられるが、次の「陰盛陽虚者汗出即愈、下之則死」の条文は逆に病邪が陰（裏）から入る病理観を前提にしていると理解しなければならない。「傷寒例」では病邪が表からも裏からも入ると考えていたことが⑰の条文から理解される。

これまで述べてきたように、「傷寒例」における虚盛の概念は運氣論の虚風、実風の虚実の概念に近い。虚実の概念に限らず、三陰三陽等の種々の漢方の基礎的な概念について言えることであるが、同じ用語でも初期の段階では外界の規範を説明するための用語であったものが、時代が下るにしたがって、体内のことを説明するための用語に変わっていったことを確認することができる³³⁾。ここにおける虚実の概念もその一例といえるであろう。

虚実の問題に加えて、さらに不思議な議論が⑰の中に存在する。それは、陽盛や陰盛の時はむやみに治療を施さず、自然治癒に頼った方がよい、という見方である。⑰の条文の後半に「陽盛」「陰盛」などの規則性を持った気が活発に動いているときは、神丹や甘遂等の強い発汗・下の丸散剤の乱用は言うまでもなく、丸散剤よりも弱い、桂枝湯や承氣湯などの湯液を与えることも控えなければならない（「陽盛必亡也」「陰盛必夭也」という内容の記述がみられる²⁾。今日では失われている自然治癒の見方がここに見出される。この自然治癒については次節で改めて検討したい。

10. 自然治癒

「傷寒例」にみられる自然治癒の見方を「四時正気」の立場から検討した。

- ⑱「仲景曰陰陽大論云、凡傷寒之病多從風寒始也。表中風寒、必裏不消化也。未有溫覆而當不消者也。若病不存証疑、欲攻之者猶須先解其之表、後乃下之」(敦煌本)

宋板の「傷寒例」では⑱の条文は「始表中風寒、入裏則不消矣」となっており、「表から入った風寒の邪気が裏に入っても消散しない」という内容の文章になっている。しかしながら、⑱の条文は以下に展開される条文(後述⑲、⑳)の内容から考えて両感の病についての議論であり敦煌本の記述が正しい。敦煌本の⑱の文章は「傷寒は表裏に病証をあらわす。表に風寒があたれば必ず裏に不消化の病証をあらわす。表邪に対して温覆の治療をしないと裏の不消化の病証は治らない」として先表後裏の順番で治療を行うことを述べている。この理論で行くと、表邪を治すと裏証の不消化も自然と治ることになる。

- ⑲「若表以解而内不消者、自非大満大実、腹鞭者必内有燥屎也。自可徐徐下之。雖経四五日不能為害也」(敦煌本)
- ⑳「若病不宜下而強攻之者内虚熱入則為協熱遂利、煩躁諸変不可勝数也。則輕者困篤重者必死」(敦煌本)

⑱の条文に続いて本条文(⑲、⑳)が存在する。⑱の条文では先ず表を解して後にこれを下す、という、いわゆる「先表後裏」の治療の順番を述べているが、次の⑲や⑳の条文では表を解した後の下すことに対して消極的である。⑲では燥屎がみられる程度だったら自然と下るから、4、5日便秘したからといってもほうっておけ、という内容のことを述べ、⑳では、無理に下すと内虚に熱が入り込み病状が悪化すると述べている。このように裏を攻めることに対して注意深く行う必要がある

という見方の背景には「四時正気」の病と「変成病」の見方が存在すると考えられる。「四時正気」が体の浅い部位から深部に入るにしたがって外界の気が持つ規則性は薄れていく。このため、体の深部に入った病邪の動きを読み切るのは難しい。このような背景を基に、むやみに下すということはやめて様子を見ようという方法論がとられたのであろう。一方、季節外れの「時行の気」を受けた場合とか、「変成病」に関しては外界の持つ規則性には期待できないので治療者の判断に委ねるしかない。㉑の条文はこの「変成病」の段階の治療の困難さを述べたものと理解することができる。

⑲における、「四時正気」の規則性に依存して病の様子を観察する、という姿勢は、いわゆる「自然治癒」を意味する。一般に「自然治癒力」というと、西洋伝統医学に見られる概念で、小宇宙(人体)の有する治癒力を意味する³⁴⁾。ここにおける「自然治癒」はまさしく外界の自然が有する規則性で、これが体に入ると治癒に向けて働く意味である。一般に言われる「自然に治る」という概念もここで述べた「自然治癒」に他ならない。

摘 要

『傷寒論』「傷寒例」の中に見られる「四時正気の病」と「変成病」の病理を中心に検討を加え、以下の点を明らかにした。

- 「傷寒例」では多元的な病因論の立場から病を i) 四時正気による病と、ii) 時行の気による病の2つに大別している。この区分は運氣論における「実風」と「虚風」の見方に近い。
- 四時正気は本来正気なので病邪になっても経脈に添って規則的に伝変する。一方、時行の気は邪気なので病の伝変も不規則的である。
- 「傷寒例」では一元的な病因論の立場から、病を i) 傷寒、ii) 両感、iii) 変成病、の3段階に区分している。i) は寒熱証の段階、ii) は表裏証の段階、iii) は病証が複雑に絡み合った変成証の段階である。
- 四時正気、あるいは傷寒の邪気の流れは表においては規則性を有するが、裏に入ると規則性は弱まる。外界の規則性を持った気は体内に入

ると「自然治癒力」ともなるので、これを大切にした治療方法を採用すべきである。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、東京理科大学薬学部故中村輝子先生にご協力賜りました。また、北里大学東洋医学総合研究所小曾戸洋先生に適切なお助言を賜りました。ここに深謝します。

文献および注

- 1) 丸山敏明. 傷寒例について. 中医臨床 1982; 3 臨時増刊号 日中傷寒論シンポジウム記念論集: 307-312
- 2) 遠藤次郎, 鈴木達彦. 『千金方』傷寒門所引の華佗方に見られる原始的な傷寒の治法. 日本医史学雑誌 2010; 56(4): 513-526
- 3) 叢春雨主編. 敦煌中医薬全書. 北京: 中医古籍出版社; 1994. p. 95-99
- 4) 「高湛養生論」に「王叔和 …… 編次張仲景方論為三十六卷, 大行於世」とある。また、『脈経』巻7の最後に「治傷寒形証, 所宜進退, 晋王叔和集仲景評脈要論」とある。
- 5) 『傷寒論』の仲景の序文の中に「撰用素問, 九卷, 八十一難, 陰陽大論, 胎臘葉録」とある。
- 6) 「新撰」は王叔和により撰集されたもので、「昔人撰集 …… 今抄事要」とある。
- 7) 石田秀実. 中国医学思想史. 東京: 東京大学出版会; 1992. p. 144
- 8) 『康平本傷寒論』によった。宋板では iii) は i) ii) と離れているが、康平本では i) ii) iii) と連続している。内容的には両者は変わらない。
- 9) 「傷寒例」に「其不兩感於寒, 更不伝経, 不加異気者至七日太陽病衰 ……」とある。
- 10) 『傷寒論』では規則にのっとった汗吐下の治療を行っても、治らない病を壞病と言っている（「太陽病三日已発汗若吐若下若温針仍不解者此為壞病」）。
- 11) 『素問』「太陰陽明論」に「傷於風者上先受之, 傷於湿者下先受之」といった風邪と湿邪を対立的にとらえている例がみられる。
- 12) 『素問』「脈要精微論」に「彼春之暖, 為夏之暑, 彼秋之忿, 為冬之怨」と四氣に人氣「忿, 怨」を配当する例も見られる。
- 13) 遠藤次郎, 鈴木達彦. 『傷寒論』傷寒例に見られる三陽三陰論. 東洋医学雑誌投稿予定
- 14) 『難経』49難に「何謂五邪, 前有中風, 有傷暑, 有飲食勞倦, 有傷寒, 有中湿, 此所謂五邪」とある。58難の「傷寒有五」と対比させると、「飲食勞倦」と「温病」が重なる。両者は人氣に属する変成病という点で共通する。「温湿」が「中湿」となっている。
- 15) 白川静. 字統. 東京: 平凡社; 1984
- 16) 文献15)、「変」に引用されている「精気は物と為り, 遊魂は変と為る」の死者を意味する例も同意。
- 17) 『甲乙経』の序文中の「窮神極変而鍼道生」の「変」も同意。
- 18) ⑩「人変病焉」も同意。
- 19) 『素問』「脈要精微論」に類文がみられる。これを用いて⑩, ⑪の文意を補完することができる。
- 20) 北里研究所東洋医学総合研究所編. 清・陳世傑『金匱玉函経』. 東京: 燎原書店; 1988. 『宋板傷寒論』にはない。
- 21) 鈴木達彦, 遠藤次郎. 厥の原義とその病理観. 漢方の臨床投稿予定.
- 22) 文献15)「行」では「東西を行といひ, 邪(斜)行を錯といふ」を引用している。前者を「陰陽并」, 後者を「陰陽交」に類比させて考えることができる。
- 23) 文献15)「交」では、古い易交に交じわる形のものがあったことを記している。
- 24) 『素問』「評熱病論」では「熱論曰」として「熱論」から引用した条文を記している。内容から考えて、ここにおける「熱論」は『脈経』7-18が引用する熱病論と同じと考えられる。
- 25) 複雑な変成病に関しては『金匱要略』で展開させたと見るのが妥当であろう。
- 26) 『傷寒論』には寒邪を陰邪, 風邪を陽邪として風と寒を対立的に論じる局面も存在する。「夫風傷陽, 寒傷陰」(『脈経』1-9)、「夫寒者陰気也. 風者陽気也」(『素問』「瘧論」)
- 27) ⑰は敦煌本の文であるが、宋板の文と58難の文は極めて近い。
- 28) 『難経集注』「楊曰」「虞曰」など
- 29) 宋板では「夫陽盛陰虚, 汗之則死, 下之則愈」となっている。
- 30) ⑰の条文は『外台秘要方』, 『太平聖恵方』では表現が随分と異なっている。「表和裏病, 下之而愈, 汗之則死, 裏和表病, 汗之而愈, 下之則死」となっている。⑰の条文が一般的な常識から遠のいたために書き換えられたと推察される。
- 31) 『千金方』の「華佗方」の中にも見られる。文献2) 参照。
- 32) 『靈枢』「百病始生」にも同様な虚実の見方が存在する。「兩虚相得, 乃客其形, 兩実相逢, 衆人肉堅」
- 33) 「陰盛陽虚」などと記されているものの、「盛」の字は「虚」と対立しない。「盛」は「衰」と対立し、「五六月陽気已盛, 七八月陽気已衰」のように、外界の陰陽の気の盛衰を論じる時に使われることが多い。「盛」の字は時代が下ると、体内における虚実の「実」の字に交代し、さらに、「洪, 大, 緊」などの脈論の専門用語に交代していくという変遷を追うことができる。
- 34) 遠藤次郎, 中村輝子, マリアサキム. 癒す力をさぐる. 東京: 農山漁村文化協会; 2006. p. 40-41

Significance of Sijiseiki Disease and Henseibyō Disease on the Shanghanli Chapter in the *Shanghanlun*

Tatsuhiko SUZUKI¹⁾, Jiro ENDO²⁾

¹⁾Oriental Medicine Research Center, Kitasato University, ²⁾Chiba Prefecture

It seemed that the chapter “Shanghanli” (傷寒例) in *Shanghanlun* (『傷寒論』) had been incorporated into the text of the *Shanghanlun* by “Wang shuhe (王叔和)”. Therefore, the “Shanghanli” wasn’t studied as adequately as the original *Shanghanlun* written by “Zhang Zhongjing (張仲景)”. We focused on the significance of “Sijiseiki (四時正気)” disease and “Henseibyō (変成病)” disease in the chapter “Shanghanli” and revealed their relation to the ideas on pathology in the *Shanghanlun*. In the theory of “Sijiki (四時気)”, the four seasons each had their own “Qi (気)”, called “Sijiki”; the cold belonging to winter, the warm to spring, the hot to summer and the cool to autumn. The influence of “Sijiki” in each season caused the disease of “Sijiseiki”. Since “Sijiki” was related to the normal “Qi” for each season, “Sijiseiki” disease was expected to be recovered from in order. When “Sijiseiki” disease had not been cured in each season, it caused a complex disease according to the influence of other seasonal “Sijiki”; “Henseibyō” disease.

Key words: *Shanghanlun*, Shanghanli, Sijiseiki disease, Henseibyō disease